日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第109号　2003年10月

アメリカ詩人たちにとっての9・11とイラク攻撃

小　泉　純　一

9・11のオサマビンラディンによる世界貿易センターテロとその後のアメリカの中東政策，対イラク戦争はアメリカの詩人たちに様々な影響を与えている．それは，アメリカ詩人たちの意識に影響を与え，詩の素材ともなってきた．また中東へのアメリカ政府の政策に対し，芸術家としてどのような態度をとるかと言う点で，ブッシュ大統領の政策に反対する抗議活動を行っている詩人たちもいる．

政治的事件が芸術家たちに影響を及ぼした点では，ベトナム戦争以来だろう．問題の根を探れば，イラクへの湾岸戦争があり，またパレスチナ問題，イスラエルの建国にまでさかのぼることができる．さらに角度を変えるなら，欧米世界がアジアやアフリカなどの諸国とどのような関係を築こうとしてきたのかという歴史的な課題にも関わる問題だ．アメリカの言う民主化とは文化やライフスタイルのアメリカナイゼイションを意味するのであるなら，多元文化主義が説くところの文化の多様性を否定するものであるし，アメリカで生きることを強いられてきたアフリカ系アメリカ人などが抱え込まざるを得なかった問題とも通底している．

このような政治的な文脈の中で同時代のアメリカ詩やアメリカ詩人をとらえると，どのような課題が見えてくるのかを考えておきたいと思っている．それは数年もたてばただ忘れ去られるだけの事件になっているかもしれない．しかし，その時代の風に吹かれていたアメリカ詩人たちが，何を問題ととらえたか以上に，どのように問題をとらえていたかを忘れるべきではないと考えるし，それ以上に事実をまとめておくことにも意味はあるだろう．

誤解を避けるために言っておけば，詩人たちが政治的な問題に積極的に参加すべきだと言う主張をしたいわけではない．多くの詩人たちが日常生活をする上で，対中東問題が避けて通れない意味を持ち，それが作品に影響し，詩人として生きる原則に関わる問題になっている状況を示しておきたいのだ．アメリカ詩人のナショナリティはますます多様化するだろう．アフリカ系，日系，チャイニーズ，コリアンなどのアジア系，チカノなどラテン系，それに加えて中東系のアメリカ詩人．今後，ヨーロッパ系アメリカ人の量的な意味での相対的優位はどんどん崩れていく．そのときに質的な意味で西欧が築いてきたアメリカの価値観や文化がどのように変化するのか，人種的な多様性を持つ個人がどのような文化を作り出すのか，この将来の課題に対して，これか

ら述べる状況が一つの手がかりになるのではないかと望みを抱いている．

私がこのテーマに関心を持ったのは，現在のアメリカの桂冠詩人ビリー・コリンズに関する記事を主に『ニューヨーク・タイムズ』などで漁っているときであった．前半部では 9・11 を素材にしてどのような作品が書かれているかを何篇か紹介したい．後半部では対イラク戦争開始直前に企画されながら中止になってしまったホワイト・ハウスでの詩のシンポジウムのいきさつを明らかにしつつ，アメリカ詩人による反戦活動について触れてみたい．

ベトナム戦争がアメリカ人の意識の中で整理されるのに長い年月がかかったのと同じように，9・11 も同じような時間を必要とすることだろう．事件直後から膨大な量の報道が続き，時がたつにつれやや下火になり，1 年後には事件を振り返る特集が新聞や雑誌で組まれていた．雑誌『ニューヨーカー』の 2002 年 9 月 16 日号で，ゴルウエイ・キネルとチャールズ・シミックの 2 人の詩人が追悼の詩を寄せている．キネルの作品は "When the Towers Fell"「タワーが崩れたとき」と題され，フランソワ・ヴィヨン，ハート・クレイン，パウル・ツェラン，アレクサンドラ・ワット，ウオルト・ホイットマンと言った詩人たちの詩句を引用した，3 ページに渡る二百数十行のもの．ツインタワーが崩壊した瞬間を写実的に回想し，タワーのなくなった同じ風景をマンハッタンのビルから眺めている自分の思いを作品にしている．シミックのものは "Last September"「去年の 9 月」と題された短い作品で，対岸のマンハッタン島を 1 年前に見ていたときの思いを言葉にしている．

ニューヨーク一の高さを誇るツインタワーも完成直後であれば目新しさもあるだろうが，そこの住人にはほどなく日常の一つとなってしまう．しかし，それは崩壊することで，新たな意味を持つことになる．

From our high window we saw the towers
with their bands and blocks of light
brighten against a fading sunset,
saw them at any hour glitter and live
as if the spirits inside them sat up all night
calculating profit and loss, saw them reach up
to steep their tops in the until then invisible
yellow of sunrise, grew so used to them
often we didn't see them, and now,
not seeing them, we see them.

このタワーそのものがアメリカを象徴するものであることを無意識のうちであれニューヨーカーは受け止めていたことだろう．日没の太陽を背にしたこのビルの眺めの美しさ，夜中でも窓の明かりは消えることがないのはそこで働く者がいるからで，アメリカの経済力の強さと見た目の美しさが融合している．このテーマは目新しいものではないが，それをツインタワーという建物が象徴し，新たな高みを獲得したことで，アメリカン・ドリームの再確認を多くのアメリカ人はし

たことだろう．建物の高さや，それが象徴する意味は，時間とともにすぐに色あせてしまうが，何かを喪失することで失ったものの真の姿や意味が分かるようになるのはよくあることだ．しかしそれをこの事件を例にとり「見えないからこそ，見えている」というパラドックスを使われると，この詩の奥行きは一挙に広くなる．

第 2 節ではその時ビルの中で仕事をしていた人たち，ロンドンに電話をしている銀行家や朝食のサンドイッチをデリバリー中のウンベルト，電話で仕事をしているトレーダーたちの姿がキネルには見えている．さらにこの死は，貧しいものにも金持ちにも，賢者にも愚か者にも，誰にも等しくやってきたことが示され，この手のジェノサイドの性格を確認している．続く第 3 節ではあの飛行機が激突した瞬間が描かれている．

The plane screamed low down lower Fifth Avenue,
lifted at the Arch, someone said, shaking the dog walkers
in Washington Square Park, drove for the north tower,
struck with a heavy thud, releasing a huge bright gush
of blackened fire, and vanished, leaving a hole
the size and shape a cartoon plane might make
if it had passed harmlessly through and were flying away now,
on the far side, back into the realm of the imaginary.

ツイン・タワーに航空機が衝突した瞬間，テレビで報道されたあの瞬間だ．旅客機がタワーに向かって飛んできて，轟音と共にタワーに衝突し，巨大な穴をあける．もし漫画であったなら，その穴を残したまま，旅客機は向こう側に飛びつづけることだろう．映像を見た者の感覚をトレースしていると言うべきだろう．あるいは，追確認と言ったほうが分かりやすいだろうか．これに続く節では，血を流したり足を引きずるなどして逃げ惑う負傷者の姿が描かれている．これも，報道の映像でおなじみの情景だ．

ここまでならこの詩が伝えるものは報道の映像と代わりばえはしない．この後の五節から詩人独自の想像力が発揮し始めてくる．

Some died while calling home to say they were O.K.
Some died after over an hour spent learning they would die.
Some died so abruptly they may have seen death from within it.
Some broke windows and leaned out and waited for rescue.
Some were asphyxiated.
Some burned, their very faces caught fire.
Some fell, letting speed them through their long moment.
Some leapt hand in hand, the elasticity in last bits of love-time letting——I wish
I could say——their vertical streaks down the sky happen more lightly.

ここで描かれている情景も映像で見たことがあったり，報道で知らされたものを下敷きにしてい

る．絶望的な気持ちで死を迎えたもの，即死だったもの，窓を破って逃げようとしたもの，窒息したり，火傷を負ったもの，ビルから落下したもの，手をつないで落下したものたち．戦死者の数は合計で示されるが，個人にとっての死は一つ一つが特別なものであるから，それを言あげすることは詩人としての務めの一つである．亡くなったものたちの追悼を行うためにキネルが選んだ表現方法は，アレン・ギンズバーグを経由してホイットマンにたどり着くことができるカタログ的な呼びかけである．ギンズバーグはマンハッタンの文明を動かす原動力をモラックと呼び，それに精神を侵されている人間たちに同じように呼びかけていた．ギンズバーグの「吠える」が亡くなったもの，健康を害したものたちへのエレジーであるように，亡くなったものたちへの追悼の思いが内容的にも詩の形式の面でも表現されている部分だ．

さらにキネルは作品の世界を 9・11 の限定された時間から解放し，空間的にも時間的にもより大きな視点からとらえようとする．この事件を個別の問題として処理するのではなく，まずマンハッタンを相対化し，アメリカの歴史という文脈の中でこの事件を理解することを試みている．

This is not a comparison but a corollary,
not a likeness but a lineage
in the twentieth-century history of violent death——
black men in the South castrated and strung up from trees,
soldiers advancing through mud at ninety thousand dead per mile,
train upon train headed eastward made up of boxcars shoved full to the
　　corners with Jews and Gypsies to be enslaved or gassed,
state murder of twenty, thirty, forty million of its own,
atomic blasts wiping cities off the earth, firebombings the same,
death marches, starvations, assassinations, disappearances,
entire countries turned into rubble, minefields, mass graves.
Seeing the towers vomit these black omens, that the last century dumped into
　　this one, for us to dispose of, we know
they are our futures, ...

機械文明の進歩は武器の性能も向上させ，大量殺戮を可能にしたのが 20 世紀の現実である．9・11 で亡くなったものたちも，そのような文明のあり方の一つの帰結だとするなら，この状況はこれからも同じように継続する．歴史をさかのぼるなら，アメリカの南部でリンチを受け殺され木にぶら下げられ「奇妙な果実」と呼ばれる黒人たち，泥の中で命を失った夥しい数の兵士，貨物列車にぎゅうぎゅう詰めにされガス室送りとなったユダヤ人たち，原子爆弾などの爆撃の犠牲者がいる．戦争の視点から見れば，死神が跋扈しているのが 20 世紀で，餓死，暗殺，失踪などの行方不明などの犠牲者を数え始めればきりがないだろう．ツインタワーから立ち上る煙はこれまでの人間の不幸を象徴する災いの兆しとなる．内戦を除いて他の国との戦いで自らの国を戦場としなかったアメリカ，従って民間人が戦火に巻きこまれることのなかったアメリカで，「これこそ，我々が取り組むべき問題で，我々の未来なのだ」という言い方は，戦争で負けたことがあ

るものたち，虐げられてきたものたちにとっては，ナイーブに聞こえかねないものだろう．アメリカはベトナム戦争での敗北を 90 年代に入って乗り越えたと言われるが，そこから何かを学んで新しいメンタリティを獲得したのだろうか，あるいはただ昔の強いアメリカに戻っただけなのだろうか．後者であるとするなら，9・11 は矢張り起こるべくして起きた「当然の結果」であるというキネルの言葉に同感できる．

キネルのこの作品で評価できる点はこのテロ事件の背景にある 20 世紀のメンタリティをアメリカ人の中に内面化しようとする点にある．作品の最後でキネルはハドソン河の辺にいて，プレートに刻まれたホイットマンの詩の一節を読んでいるうちに，ホイットマンの他の詩行を思い出している．

.... Then I remembered
what he wrote after the war was over and Lincoln dead:
I saw the debris and debris of all the dead soldiers of the war,
But I saw they were not as was thought.
They themselves were fully at rest——they suffer'd not,
The living remain'd and suffer'd, the mother suffer'd
And the wife and the child and the musing comrade suffer'd...

戦争とは勝つこともあれば，負けることもある．戦死するものもいれば，身内のものを失い悲嘆にくれる家族もいる．負けた国のものには悲しみや，失ったものを忘れることは難しい．逆に勝った国では，悲しみやら失われたものより，勝つことによって得られるものがたたえられる．この詩の言葉も同じではないだろうか．独立戦争の時期のリンカーンをホイットマンは支持していた．しかし戦争が終わり，傷ついた兵士を目の前にしたとき，ホイットマンはそれまでとは異なった視点から世界を見る目を手に入れた．死んだ兵士は安らかな眠りにつき，身内をなくした家族の苦しみはそこから始まる．勝ったからといって全ての問題が解決するわけではなく，勝った者たちの側にも戦争の不幸は同じように起きるのだ．国家が戦争に勝つこと負けることと，個人の幸不幸は同じ土俵で語ることはできない．

詩や小説などの文学は，社会のシステムや理念，統計的に理解された社会の実体を対象にするより，一個人の思いや考えに焦点を当てる点で優れている．巨大な社会とちっぽけな個人が対峙した際，文学は個人の側に味方する．この詩は次のように終わる．

As each tower goes down, it concentrates
into itself, transforms itself
infinitely slowly into a black hole

infinitesimally small: mass
without space, where each light,
each life, put out, lies down within us.

ツインタワーは姿を変え，崩壊し，小さなブラックホールへと化していく．そのブラックホールとは，広さも無ければ，光も命も消えてしまった場所．そしてそれが我々の中に潜んでいるとキネルは描写している．その痛みを抱えてどのようにこれから生きるのか，どのような答えを導きだすのかが問題の本質だとキネルは言いたいのではないだろうか．たとえば戦火によって非戦闘員が殺されたときに，死の不条理や暴力性，生き場のない無力感を人間は感じてきた．ツインタワーへのテロはアメリカ人にその思いを無意識のうちに感じさせ，キネルはそれを普遍的な視点から捉えようとしている．テレビでこの場面を目の当たりにした者の思いをトレースしながら，より広いコンテクストの中で問題を捉えようと言うのがキネルのねらいだろう．

シミックの作品はキネルの作品に比べると短い抒情詩だ．タイトルは「去年の九月」．日常生活の中でこの事件がどのように消化されたのか，その一例と言える．マンハッタンを対岸に見ることができるあたりで，郵便のトラックが通りすぎ，かもめがのんびり休んでいる．そんなのんびりした情景を脅かすかのように，悲劇が誕生し，拡大し始める．

Last night you thought you heard television
In the house next door.
You were sure it was some new
Horror they were reporting,
So you went out to find out.
Barefoot, wearing just shorts.
It was only the sea sounding weary
After so many lifetimes
Of pretending to be rushing off somewhere
And never getting anywhere.

タイトルの１年後から，事件の翌日へと場面は変化している．昨晩のことだ，隣の家のテレビから聞こえてくる音，今まで見たことも無い大惨事だと思って，外に飛び出してくる．するとそこにあったのはいつもと同じ波打つ海で，どこかにたどり着こうとしているのだが，どこにもたどり着くことは無いという．ここではあの事件の特殊性は否定されていると言うべきだろう．一種の無常感を感じてしまう．

作品を離れ，シミックの経歴を考えるとまた異なった見方をすることができる．シミックは子ども時代は今のユーゴスラビアで育ち，第二次大戦の真っ最中だった．人が死ぬのは日常茶飯事．戦闘の中を生き延び，戦後アメリカに移住してきている．彼の作品の特徴は無気味さと言えるが，ここにはそれが無い．死が日常であったものの視点から見れば，テロ事件そのものを素材にするより，人間と比べてより永遠に近い海の様子を歌うことが現実に近いのだろう．どこかにたどり着こうとして，どこにもたどり着けない部分に，人間の歴史を読みこむなら，ツインタワーのこの事件も特別な出来事ではない．今までにもたくさんあった事件の一つにすぎなくなる．

作品の最後の節は読み方によってはシミックらしい無気味さを読みこむことができる．

This morning, it felt like Sunday.
The heavens did their part
By casting no shadow along the boardwalk
Or the row of vacant cottages,
Among them a small church
With a dozen gray tombstones huddled close
As if they, too, had the shivers.

事件の翌日の朝はちょっと神がかっている．岸辺の木製の遊歩道にも小屋の並びにも影が無い．それくらい日差しが真上からさしているのだろうが，シミックらしい味わいを予感させる．そしてそこに小さな教会を登場させるもの，ホラードラマを予感させないわけではない．教会には 1 ダースほどの墓石がひっそりと寄り添っている．最後の単語は「震え」と「破片」両方の読み方が可能だ．あの事件のときこの墓石も震えたろうと読むことができる．またタワーにこの墓石をたとえるなら，タワーが崩壊し砕け散ったように，この墓石も欠けて，破片が落下している，とも読むことができる．後者の読み方のほうが，作品の仕掛けは大きくなり，コンシートの側面が強調されるだろう．キネルと比べてシミックのほうがこの事件を消化していると思える．その理由は，シミックはそのような人間の暴力や不条理を経験済みだからだと言えるのではないだろうか．

2 人の詩人が 9・11 をどうとらえたのかを見ることは，一般論として戦争やテロなどの事件を詩人達がどのように受け止めているのかと言う流れで捉えてもらいたい．キネルとシミックに共通する態度は，冷静な立場でこの事件を捉え直そうという姿勢だろう．アメリカ詩人の中には，アメリカ合衆国を支配してきたワスプを攻撃する素材としてこの事件を取り上げえている者もいる．イスラム風にアミリ・バラカと改名したルロイ・ジョーンズだ．バラカは 2001 年度のニュージャージー州の桂冠詩人に選ばれたが，式典で "Somebody Blew Up America"「誰かさんが破壊したアメリカ」を朗読し，その資格を州知事から剥奪されると言う事件を引き起こしている．

They say it's some terrorist,
some barbaric
A Rab,
in Afghanistan
It wasn't our American terrorists
It wasn't the Klan or the Skin heads
Or them that blows up nigger
Churches, ...

白人のテロリストがいないわけではない．白人至上主義のクークラックスクラン，ネオナチを連想させるスキンヘッド，黒人の教会に爆弾を投げ込む者たち．でもツインタワーに激突したのは野蛮なアフガニスタンのアラブ人だと彼らは言うのだ．

最初の 2 節ではこのように，攻撃を仕掛けたのはアラブ人で，黒人を迫害してきた白人ではないと述べている．3 節目以降では視点をがらりと変え，そう言って洗脳しようとしている者の性格を浮き彫りにしようとしている．

They say (who say?)
Who do the saying
Who is them paying
Who tells the lies
Who in disguise
Who had the slaves
Who got the bux out of the Bucks
Who got fat from plantations
Who genocided Indians
Tried to waste the black nation

「彼らは言う，誰がだ？ それを言った奴らが，金で雇った奴ら，嘘をつくもの，上辺を繕うもの，奴隷を所有していたもの，金をもうけたもの，農場で蓄えを増やしたもの，インディアンを大量殺戮した奴らが黒人の国を破滅させようとした奴ら」．バラカの立場に共鳴するものが，この作品の朗読を聞いたなら，彼らの思いを代弁しているだけに，その反応は凄まじいものだろう．そうでないものにとってはナンセンスなたわごとに過ぎない．「彼ら」と総称されているものは，ワスプの集合体だが，同一人物ではない．そこに論理の飛躍があることは明らかだ．バラカが非白人の立場から，そのように批難する気持ちはわかるが，これでは両者の対立を煽るだけではないだろうか．

バラカは 9・11 の事件をアメリカを支配してきた白人を批難するための一つの素材と利用しているに過ぎない．この点には注意を払う必要がある．白人の権力者や，資金を持つ白人たちが，どのようなアメリカを作ってきたのか，持たざるものをどのように搾取してきたのか，迫害してきたのかを，延々とバラカは告発する．

Who lived on Wall Street
The first plantation
Who cut your nuts off
Who raped your ma
Who lynched your pa
....
Who created everything
Who the smartest
Who the greatest
Who the richest
Who say you ugly and they the goodlookingest
....

Who own the mine
Who twist your mind
Who got bread
Who need peace
Who you think need war
Who own the oil
Who do not toil
Who own the soil
Who is not a nigger

黒人に対する性的な暴力事件，マニフェスト・デスティニーに結びつくワスプの価値観こそが正しいと言う考え，経済の実権を握るものたちの影響力，バラカの問題意識には傾聴すべき側面がある．たとえば，ものの価値がお金でしか判断できない風潮を作った点でアメリカは大きな責任を負っているだろう．しかし，アメリカがはらんでいる問題はここでは羅列されるだけであり，悪いのは全て白人の支配者たちだとされ，それ以上問題は追求されない．相手を否定する仕方で見れば，白人の側がやってきたことを，非白人の立場で同じようにやり返しているに過ぎないのではないかと感じられる．このようなやり方では抑圧されてきたものの意識を高揚させることはできても，問題の解決にたどり着くことはないだろう．

この詩が物議をかもした理由の一つは，ツインタワーへの攻撃に関するユダヤ人への噂を利用していることにある．ユダヤ人のエリートは事前にこの攻撃を知っていて，その日はツインタワーに近づかなかったと言うものだ．

Who found Bin Laden, may be they Satan
Who pay the CIA,
Who knew the bomb was gonna blow
Who know why terrorists
Learned to fly in Florida, San Diego
....
Who knew the World Trade Center was gonna get bombed
Who told 4000 Israel workers at the Twin Towers
To stay home that day
Why did Sharon stay away?

Who? Who? Who?

ビンラディンをかつてアメリカの情報組織が支援したこと，CIA が国益を守ると称して行ってきた不正は否定のしようがない．これらは今後アメリカが説明すべき課題だ．アメリカの情報機関が事前に何らかの攻撃があることを察知していたらしいことは解明されつつあった．巨悪を正すためには多少の悪とは手を結ぶこともあったことは否定できない．これもアメリカ人にとって解決すべき課題であるのだ．しかし，状況がはっきりしないまま，このような発言をすれば，詩

人としての資質を問われることは明らかだ．その上，ユダヤ人が事前にこの事件がおきることを知っていて，現実に 4 千人が災難を逃れたとしたら，犠牲者の関係者にすれば，なぜその危険を同じように他のアメリカ人に知らせなかったかは大問題になる．しかし，犠牲者の中にはユダヤ人も存在した．バラカの真意はともかく，このような不正確なやりかたでユダヤ人問題を取り上げることは，それが噂であったとしても，詩人としての誠実さを疑われることになるだろう．

バラカのねらいはアメリカを支配し，形作ってきたものの正体を明らかにしようとすることにある．9・11 の事件をきっかけにして，その問題を改めて提起しているのだ．バラカは自分の敵であるアメリカと切り離されているから，相手の抱える問題が内面化することはない．作品は悲痛な叫びで終わる．

Like an Owl exploding
In your life in your brain in your self
Like an Owl who know the devil
All night, all day if you listen, Like an Owl
Exploding in fire. We hear the questions rise
In terrible flame like the whistle of a crazy dog

Like the acid vomit of the fire of Hell
Who and Who and WHO who who
Whoooo and Whoooooooooooooooooooo!

炎の中で爆発するフクロウのイメージには，崩壊するツインタワーを重ねることができる．フクロウは闇の鳥でもあり，智恵を象徴するから，アメリカの闇にはびこる元凶の正体を突き止める鳥としてふさわしい．しかし，そのフクロウが炎に焼かれ爆発しながら発しているのが「誰が」という問いである．最後は悲痛を越えて，滑稽ですらある．たとえば一つの答えは，そのような憎しみの念をアルカイダに植えつけたアメリカの対外政策が上げられるだろう．力でもって相手を凌駕しようとするやり方は建国にまでたどることができるが，その根底には他者に対する根源的な恐怖感がある．バラカはそこまでの視点をここでは示していない．アメリカの支配層にいる者たちを断罪する作品として見るなら，朗読するのを聞けばかなりのインパクトがあることは否定できない．しかし，印刷されたものを読む限り，足りないところが気になる作品なのだ．9・11 をキネルやシミックとは違う受け止め方をバラカがしていることは分かる．迫害されてきた側に立つとは言え，同じ人間としてこの問題を受け止める姿勢が必要なのではないか．この作品のねらいはそこにはなかったと言うことは簡単だ．しかし，白人支配層が自分の利益しか考えていない，自己中心的な人間だから，このような事件が起きたのだというのが結論であるなら，この問題の重みを受け止めようとしている他のアメリカ人との意識のずれを埋めることは容易ではないだろう．

9・11 を契機にアメリカ人の中東への思いは研ぎ澄まされていった．強硬派は中東の民主化を

掲げアメリカの存在感を高める方向へ進み，民主派はそれに対する懸念を表明し，その後ろには利権を確保することに躍起となる者たちもいた．特にイラク攻撃の現実性が高まるにつれ，この戦争に賛成するものたちと反対するものたちの論争が起こり，文学者もその渦に飲み込まれていったことは忘れるべきではない．後半ではそのような状況について，ファースト・レディのローラ夫人が企画しながら，没になった詩のシンポジウムについて紹介する．私がこの事件について初めて知ったのは 2 月後半の『ニューヨーク・タイムズ』の記事からだった．そこから時間をさかのぼって真相を理解したので，同じようなプロセスで説明をしてみたい．

ビリー・コリンズは 2001 年度にアメリカの桂冠詩人に選ばれ，2 期目の任期に入ったところで，イラク攻撃を迎えている．そもそも共和党のブッシュが大統領に選出されたとき，桂冠詩人は空席になるのではないかとの憶測もささやかれていた．ブッシュ大統領がその必要性を理解できない可能性と，ブッシュ在任中それを引き受ける詩人はいないのではないか，この 2 つの理由からだった．その憶測を裏切り，詩人としての活躍の時期で言えば短めだが，一般読者に圧倒的支持を得ているコリンズが桂冠詩人に選ばれた．それは，驚きでもあったが，妥当な選択にも思えた．コリンズは政治的な発言や，教訓を声高に語るタイプの詩人ではないこと，難しい状況でもユーモアを忘れずに窮地を切り抜けるタイプの詩人であるように思えること，などの理由からだ．

2003 年 2 月 23 日付けの『ニューヨーク・タイムズ』日曜版の付録「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」はイラク問題の特集号で「パブリック・セイフティ対プライベイト・フリーダム」というタイトルが付けられていた．その記事の中にコリンズがインタビューを受けているものがあり，次のようなやり取りが交わされていた．

> インタビュアー：桂冠詩人としてホワイトハウスでの詩のシンポジウムに招かれていましたね．結局，イラク戦争反対にそれを利用しようとした詩人たちがいることが分かって中止になりましたが．
> コリンズ：招待されていましたよ．行われていれば，行きました．どんなことになるか見たかったからね．

ホワイトハウスでの詩の企画が中止になったこと，その理由がイラク攻撃に反対する詩人たちの存在であったことが前提となっている．コリンズは質問に対して，彼らしい軽妙な受け答えをしている．まずイラク攻撃への自分の態度は何も示していない．招待されていたこの企画に参加する目的は，何が起きるか見に行くため．当然イラク攻撃に反対する詩人たちがホワイトハウス主催の企画に参加したならば，一騒動持ち上がると考えるのは当然だろう．ホワイトハウス主催の企画の意図に賛同して行くのですと答えるのではなく，高みの見物的な気持ちをさらっと言ってしまうところに，コリンズらしい軽みが示されている．

キャンセルされた企画について調べるため，この年 2 月の『ニューヨーク・タイムズ』を調べてみると，アメリカがイラク攻撃を実行するまでは，さまざまな反戦の運動が起きていたことが報道され，アメリカの文学者たちもそれに参加していた．但し，いったん攻撃が始まると，兵隊の様子や戦場の写真は細かいことまで記事で説明されるようになったが，反戦活動に関する報道

は一切消えてしまった．

文学者による反戦のアピールで目立ったものをいくつか紹介しておこう．もっとも大きく紙面を使っていたのは，詩人でナチュラリストのウエンデル・ベリーだった．2 月 9 日の紙面一面を使った意見広告を出している．タイトルは「アメリカ合衆国による国家安全政策に関する一市民の意見」．ホワイトハウスが前年の 9 月に発表した新しい国家安全政策の文書を問いただす形で書かれたかなりの長さの論文だ．一面が六つのコラムに分かれ，小さな活字でぎっしり書いてある．最初にホワイトハウスの文書の一部「我々は必要なら他の国の助けを借りずに一国で行動することを恐れない」を引用し，この「我々」とは独立宣言のそれでもなければ，「合衆国憲法」のそれでもないと断言している．ソローを彷彿とさせる筆使いで，この時代を生きるアメリカ市民として何を考えるべきなのかを説いている．抱え込むべき課題は何かと言う点では，次のような部分は示唆に富んでいるだろう．

> 湾岸戦争での勝利と 9・11 事件の間でぼくたちの戦争と平和に関する考えは変化しなかった．つまり戦争については多くのことを考えたが，平和についてはあまり考えてこなかった．ぼくたちは相変わらず敗北したイラクの人たちやその子どもたちに制裁を加えつづけてきた．他の国から輸入している石油への依存を改めるような努力を行わなかった．世界の他の国々に対するチャリティに関して何の改善も行わなかった．より大きな経済的自己信頼に向かって進まなかった．そして環境に対して大規模で取り返しのつかない破壊を繰り返してきている．9・11 の惨劇以来，明らかになったことがある．それは平和の大切さ，敵を作らないことの大切さ，無駄に人を死なせないことの大切さだ．

このような問題に早急に答えを出す必要はないだろう．根源的な問いかけは，存在し，それを抱え込んで生きること自体が答えにつながることもある．そのような性質の問いかけだ．これからのアメリカ人がこれにどんな答えを用意するかで，その真価は問われることになるだろう．アメリカは意見の多様性を許すと言う点で見習うべき国だが，ベリーはこの意見広告の論文で，自らの責任を充分果たしている．

『ニューヨーク・タイムズ』の広告のサイズは大まかに言えば二種類に分けられる．ベリーのような全面広告か，紙面の九分の一程度の普通サイズの広告だ．全面広告は当然費用もかかるのだろうが，ニューヨークを代表するメイシーズなどのデパートなら毎週のように全面広告を打っている．意見広告で全面と言うのは珍しい．

2 月 17 日には普通サイズの反戦の意見広告が出ている．広告の見出しとも言える部分には手書きで "Poets Against the War" と書かれ，字の下にはペンがレイアウトされている．

「戦争に反対する詩人たち」というのが私書箱の宛名になり，ネットのホームページの名前にもなっている．見出しに続いて，次のように書かれている．

> First Lady Laura Bush planned to host a celebration of American poetry at the White House on February 12. Instead, she cancelled the "Poetry and the American Voice" symposium after she learned that several prominent poets declined her invitation in protest against the U.S. push toward war in Iraq.

キャンセルになったシンポジウムの行われるのが 12 日だったことが分かる．その理由は，イラクへの攻撃に反対する意思を表明するため参加を取りやめた詩人がいるというものだ．この広告の一番下のほうに，ホームページに詩を送ってくださいとある．広告の文章の中では，過去 2 週間の間に 8,000 人以上の詩人たちが戦争に反対であることを示すため詩を送ってきていると報告されている．広告の下半分には 24 名の詩人の名前が載っている．主なものを列挙すると，エイドリアン・リッチ，ゴルウエイ・キネル，ローレンス・ファーリンゲッティ，ロバート・ブライ，ロバート・クリーリー，スタンリー・キューニッツ，W.S. マーウイン，ユセフ・コムヤッカなど．これだけ多くの詩人たちが声を上げたことは初めてだとも書かれていて，湾岸戦争やベトナム戦争のときとの違いが伝わってくる．攻撃をする根拠の希薄な戦争であったと言うことだろう．"Thousands of Poets, One Voice" という表現に，主義主張が様々な詩人がこの問題については意見が一致したことが象徴されている．もっともコリンズのようにこの問題から距離をおいたものもいる．

2 月 19 日には，文化のセクションに戦争に反対するポエトリー・リーディングの記事が詩人たちの写真入りで掲載されている．イベントのタイトルは "Poem Not Fit for the White House"．月曜日に吹雪の中開かれたにもかかわらず，会場のアベリー・フィッシャー・ホールはほぼ満員だったそうだ．タイトルはサム・ハミルにちなんで付けられたものだと説明がある．ハミルもあのローラ夫人のシンポジウムに招かれていたが，ホワイトハウスで反戦の詩を朗読し，それをブッシュ大統領に手渡そうと考えていたことが分かり，このシンポジウムは中止になったと説明がある．ハミルが朗読しようとしていた詩のタイトルがこのイベントのタイトルであったのかもしれない．

この記事の記者によれば，「この国のモラルの意識を語る責任に直面し，詩人たちの多くは賢明な策を選んだ．つまり身をかわす道だ．自作を読むものはほとんどいなくて，次の詩人が壇上にやってくると，責任のバトンが渡される音が聞こえるほどだった」と辛辣な評価をこの記者は下している．18 世紀のイラク詩人の詩を読むものもいた．また，マーク・ストランド，ロバート・ピンスキー，ロバート・クリーリーは名前だけ参加し，作品は他の詩人が代読している．ラッパーのモス・デフは「新たに輝ける悪夢」という題の散文を読んでいる．キネルが「私たちはレジスタンスなのです」と語りかけたときに聴衆はスタンディング・オベーションを捧げたそうだ．声高に反戦の詩を読むと言うものではなかったようだ．詩人たちの側の準備不足というべきなのかもしれない．

問題のローラ夫人の企画したシンポジウムについては 2 月 6 日付けの『ニューヨーク・タイムズ』一面に見つけることができた．一面に "Mobilizing a Theater of Protest. Again: Artists Try to Recapture Their Role as Catalysts for Debate and Dissent" と題された書き出しがあり，それに続く本体部分は後ろのページに送られている．記事の冒頭でこの事件の顛末が説明されている．ワシントン在住の詩人サム・ハミルのもとに，エミリー・ディキンソン，ラングストン・ヒューズ，ウオルト・ホイットマンを中心としたシンポジウムをホワイトハウスで行うので，

それに参加してくれるよう招待状が届いた．ハミルはこの機会を利用してイラク攻撃反対の気運を高めようと，戦争反対の詩をブッシュ夫人に送ろうと呼びかけるメールを 50 人の友人に送信した．すると 4 日間で 1,500 もの詩が送られてきた．それを知ったホワイトハウスは，この企画を延期する道を選んだ．ブッシュ夫人の報道補佐官の説明を引用しておく．

> While Mrs. Bush respects and believes in the right of all Americans to express their opinions, she, too, has opinions and believes that it would be inappropriate to turn what is intended to be a literary event into a political forum.

官僚が書きそうなそつのない文章だ．前半では意見の多様性を保証するとし，大統領夫人にもその権利は留保されるという論法である．しかし，2 つの点で疑念が残る．1 つは一市民に担保される権利と，選挙で選出された大統領のファースト・レディが果たすべき責任の問題．もう 1 つは，文学と政治は別物であると言う認識についてだ．

イラクを攻撃しようとしている時期にこのようなシンポジウムを行い，詩人たちを招いたなら，ホワイトハウスにとって耳の痛い発言があることは，明らかではなかったのか．それともホワイトハウスのこの件に関わる関係者は，そのようなことを予見できなかったのか．予見できなかったとすれば，その責任は逃れることができないだろう．ローラ夫人がこの企画のアイデアを出したとしても，まわりのスタッフが何もしなかったはずはないのだから．

もう一つは上の件とも関わるが，文学は政治とまったく別の次元に存在すると考えていたとするなら，その認識不足を追及する必要がある．また詩人のほうもそんな風に足元を見られていたことに対しては，もっと怒りを示すべきだろう．ベトナム戦争の反戦運動のなかで，ロバート・ローウエルらの詩人が詩で行ったこと，20 世紀の前半にエズラ・パウンドが詩で行おうとしたこと，他の国々では，たとえばパブロ・ネルーダのような詩人が政治家としても活躍していたことを考えるなら，文学と政治の結びつきに対し一定の配慮を下すのは当然ではないか．

「延期に終わったローラ夫人のシンポジウム」事件，あるいは「ホワイトハウスポエトリーリーディング未遂」事件の顛末はこのようなものだった．繰り返しになるが何でこんな時期にこのようなシンポジウムを行おうとしたのかという思いが頭から離れない．仮に，このような騒ぎを引き起こすことがねらいだったとしたら，このファースト・レディの企みは意外と奥が深いのかもしれない．

以上が 9・11 とイラク攻撃にまつわるアメリカ詩人たちの動静をまとめたレポートである．アメリカという国もそこに生きる詩人たちも，これから何十年もかけて解決する必要のある問題に直面していると言うのが率直な感想だ．政治と文学のかかわりの視点からも考察が必要な問題でもある．そしてアメリカに追従する形で生きる道を選び，アメリカ的ライフスタイルに適応した日本人にとっても，同じような重みを持つ課題であることはいうまでもない．

最後におまけを追加しておきたい．2 月 16 日の紙面にオノ・ヨーコさんが，紙面一面を使っ

て，「誕生日の思い」という詩を書いていた．暴力が人に及ぼす影響，戦争に対する意識，政治と文学の思惑の違いなど，込み入った問題を扱っている最中だったので，オノ・ヨーコのこの作品を目にし，ゆっくり声に出してみると，あらゆる問題を原点に戻って，単純なのだが根源的なやり方で捉え直そうとしていると感じ，さわやかな風に吹かれた思いがした．今風に言えば，癒しでもあった．彼女のような日本人のアーティストがこの時期に存在し，意思を表明することは，アメリカ人にとっても幸いなことであると思う．最後にその詩を引用し終わりとする．

BIRTHDAY THOUGHTS

We stand on this beautiful planet enjoying
the sunrise, the sunset, the change of seasons
the oceans, the mountains, the clear sky
and the lovely towns and cities we've created together

We cherish the moment of peace and quiet
We cherish the moment of having fun
We cherish every moment of warmth and love
We laugh, we heal, and we embrace

With what we've learned and experienced
With our wisdom and the sense of unity
We protect our world from destruction
For our hearts beat in unison
Even when we fight with one another

We breathe for life
We'll survive
Remember: we are one

A big hug and kiss to each one of you
I feel privileged to share this time with you
Thank you for being in my life
at times as teachers, as angels, as friends
always as blessings, always with love
Without you, I would not be

Today is the beginning of our joyful lives
Let's dance together in our hearts
and play the game of life
In love

We breathe for life
We will survive

Remember: we are love

My respect and thanks to
Nelson Mandela
Mordechai Vannnu
Aung San Sun Kyi
Amnesty International － (International)
Not in Our Name － (United States)
All Weapons into Musical Instruments － (Japan)
and so many other inspired groups and individuals
working to make this a better world

Speak out, shed light,
and stand for peace.

WAR IS OVER
(if you want it)
I love you!
yoko ono
February, 2003

※アミリ・バラカの “ Somebody Blew Up America ” はインターネットのサイトから引用した．又オノ・ヨーコの “ BIRTHDAY THOUGHTS ” も現在ネット上で見ることができる．